恐て用ざる故、毒の去る道理なし、然れども彼療治にて、病の治する事あり、是は實に治したるにあらず、自然と毒の靜りて、快氣去たるなり、其證據には、又重ておこる、それゆゑ毒こと〴〵くは去らぬものといふなり、疾醫は盡く去る、それゆゑ重て發る事なし、

〔醫斷〕病因

後世以病因爲治本也、曰、不知之、焉得治、予嘗學其道、恍惚不可分、雖聖人難知之已、然非謂無之也、言知之、皆想像也、以想像爲治本、吾斯之未能信矣、故先生以見證爲治本、不拘因也、卽仲景之法也、今擧一二而徵焉、中風頭痛、發熱汗出者、下利後、頭痛發熱汗出者、皆桂枝湯主之、傷寒寒熱往來、胸脇苦滿中風寒熱往來、胸脇苦滿、或瘧或腹痛、或熱入血室、有前證、則皆小柴胡湯主之、傷寒大煩渴中熱大煩渴、皆白虎湯主之、是雖異其因、而方則同矣、可見仲景從證不拘因也、若不得止論之、則有二矣、飲食外邪、是也、雖然入口者、不出飲食、蓋留滯則爲毒、百病繫焉、諸證出焉、在心下爲痞、在腹爲脹、在胸爲冒、在頭爲痛、在目爲翳、在耳爲聾、在背爲拘急、在腰爲痿躄、在脛爲强直、在足爲脚氣、千變萬怪、不可名狀矣、邪雖自外來、其無毒者不入、假如天行疫氣、間有不病者、天非私、人非不居氣中、是無毒也、然則一也、故仲景隨毒所在而處方、由是觀之、雖曰無因、亦可、是以吾黨不言因、恐眩因失治矣、後世論因、其言多端、不勝煩雜、徒以惑人、不可從焉、

〔本朝醫談〕四百年前、人の引こもりし時、濕熱の病とも見えずと云ふ事あり、濕熱といふ事は、宋人よりいひ出して、丹溪に至て、其說大に行はる、唐土の古人は、萬病皆風寒より起ると心得たり、傷寒論も其意なり、されば病人十に七八溫熱の劑を用ふ、丹溪の發揮せし局方の藥も、宋の時初て作りしにもあらず、古人乳石を服する餘意なり、乳石は魏晉六朝より、唐まで流行して、服する人寒食冷飲して、其熱毒を解すに至る、其禍を蒙るもの少からず、こゝに於て、宋の諸老病の因は、風寒は少く、濕熱多しといふ說を立しなり、是說おこらざりせば、五石散の害、今の世までも傳るべ